

# 宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

## 木曾義仲と京都

長 村 祥 知

### 序

十二世紀末に鎌倉幕府が成立しました。初めての武家政権ということで、たくさんさんの議論が出されています。幕府論と並行して、武士の研究も進展しました。私の関心から特に注目したいところは、武士が非常に広域的に活動しており、彼らにとつて京都が大変重要な地域であったこと、そして、武士と貴族が近い関係であったことが解明されつつある点です。かつては、武士は在地勢力であり、彼等から見て京都の権力者は打倒せねばならないはずだという考えが強かったのですが、本当はそんなことを考えてなかった人々たちを、そういうふうに見たら、結局、彼らの評価は、権力者を打倒できなかった存在という位置付けにならざるをえません。

平家の研究も進展しました。平家のように、京都に拠点があつて高位高官を目指すというあり方は、武士らしくないとして、かつては否定的に評価されてきましたが、今日に至る研究史を踏まえますと、むしろ武士の重要な側

面であると言い切つてよいと思います。特に重要なのは、京都で武家政権が成立する可能性があったことです。

しかし、平家が滅亡し、鎌倉幕府が東国で成立したという事実は、この時期の京都や畿内近国の権力構造と政治過程の必然の現象だったのではないのでしょうか。そして、こうした当該期の京・畿内近国を考えるうえで欠かすことのできない存在が木曾義仲なのです。

木曾義仲は、西暦一一五四年に生まれ、一一八四年に生涯を閉じました。田舎者で京都の王朝制度を全然分かっていない、横暴というか男らしい人だという理解が一般的です。むしろ義仲は、きちんと研究されたことが少なく、従来は、信濃（長野県）・上野（群馬県）・北陸（富山県・石川県）の地域史を研究する中で、義仲についても少し触れるというものでした。ただし、義仲に関する確実な史料がまとまって残っているのは、実は彼が没する前の九ヶ月間で、その大半は京都にいた時期です。義仲の京都での活動を研究していくことで、鎌倉幕府が成立する頃の京都の政治的特質を説明できると考えています。

## 第一章 義仲の挙兵・上洛

治承四年（一一八〇年）、伊豆の源頼朝に続いて、義仲も信濃国で平家に対する反乱軍として挙兵します。やがて治承五年（一一八一年）十一月以前に、北陸道まで支配を及ぼしていきました。義仲が信濃や能登（石川県）の武士の所領を安堵した文書から、反乱軍として成長している様子が窺えます。

その後しばらく、義仲の動きははっきりしません。寿永二年（一一八三年）五月の越中国（富山県）砺波、六月の加賀国（石川県）篠原の合戦で、義仲率いる反乱軍が平家主体の追討使に勝利しました。やがて義仲は北陸か

ら京都に向けて上洛していきます。結果的に、七月二十五日に平家は持ちこたえられなくなって西国に都落ちし、二十八日に義仲を含む反平家軍が入京します。

義仲はあえて時間をかけて上洛したのですが、その間に軍勢が膨らみました。その膨らんだ軍勢は、東海道や東山道の反平家軍だけではなくて、もともと平家に属していた畿内近国の武士や、京都で平家にゆるやかに従っていた武士たちでした。摂津（兵庫県）の多田行綱や、相模（神奈川県）の渋谷重助、甲斐（山梨県）の秋山光朝、武蔵（埼玉県）の庄四郎といった武士が、平家から主人をかえて義仲に属したことが確認できます。

のち寿永三年（一一八四年）の正月には、鎌倉から上洛してきた源義経・源範頼軍が義仲を討ちますが、その際も、もともと京都や畿内近国で義仲に属していた武士が吸収されて、義経・範頼軍が加速度的に膨張していきます。京都で東国武士が活動していたということ、そして彼等が平家や義仲といった在京武力の中枢の興亡に大きな影響を与えたことに注目しておきたいと思います。

## 第二章 義仲と王朝権威

### 一 官位等

義仲は、寿永二年七月二十八日に京都に入ってから、官位を急激に上昇させています。八月に左馬頭と伊予守、そして十二月に院御厩別当になっています。

数ある国守の中でも、伊予守と播磨守は公卿の昇進を目前とする官職であったことを、元木泰雄先生が明らかにされています。平重盛も平治の乱（一一五九年）後に伊予守になっています。義仲は、そういったことを理解した

うえで伊予守になったのでしよう。○○守という官途を有している、ともに平家を追って同時期に在京している軍事貴族層との差異化を図ることで、彼らの上に立つためだったと考えられます。

在京の馬政機関も重要です。かつて保元の乱（一一五六年）の直後に源義朝が左馬頭になり、さらに保元三年（一一五八年）に源義朝と結託していた藤原信頼が院御厩別当になっています。しかし、この信頼と義朝は平治の乱（一一五九年）で敗れて、以後ずっと、平家の一門が院御厩別当と左馬頭をほぼ独占しています。この官職が軍事的な権威の象徴のようになっていったことの表れかと思えます。

寿永三年の正月十一日に、義仲は征東大將軍になったと、櫻井陽子先生が紹介された『三槐荒涼拔書要』に引かれている『山槐記』という記録に載っています。臨時的な軍政官を帯びて権威を高めることに目的があつたと考えられます。貴族たちは、かつて平宗盛が総官という役職になっていて、それに類似しているので、縁起が悪いという話をしています。

このように、義仲は京・畿内の武士を糾合する権威の獲得を目指していました。特に重要なのが、伊予守、左馬頭と院御厩別当、臨時軍政官という、かつての平家と同じような官職についていることです。のちに義経も、院御厩別当や伊予守になっています。京都の中心を占める武力保持者が目指した一つのかたちと言えます。

## 二 女院・院への接近

義仲は、当初は北陸宮を次の天皇にしようとしていました。北陸宮とは、当時大變権威のあつた女院、八条院の孫です。しかし八月二十日に、尊成親王すなわち後鳥羽天皇が踐祚し、結局、北陸宮は天皇になれませんでした。

後白河にすれば、天皇を新しく決めるといふ自分の権限に義仲が口を出してきたのが、気に入られません。ほかに、

京中の狼藉や後白河院が荘園を持つている国で義仲が押領しているということが、同時代の史料に書かれています。そういうこともあって、後白河は義仲を嫌悪しているわけです。十一月十九日、後白河としては、勝つつもりで義仲を挑発し、合戦を起したら、義仲のほうが勝ってしまった。それが法住寺合戦です。

義仲としては、北陸宮を上にも立てることができなくなり、後白河の権威を重視せざるを得なくなっています。義仲は、法住寺合戦に勝利したあとでも、形式上は後白河を前面に押し立てて、十一月・十二月には頼朝追討や平家追討の院序下文を後白河に出させています。しかし、院の権威は、義仲自身が法住寺合戦に勝利することで自ら否定してしまって、うまく機能しなかったようです。

### 三 権門寺院領の保護

義仲が王朝権威への接近を図ったことは、天皇家の氏寺である東大寺の復興に関わる話からも言えます。東大寺は、治承四年（一一八〇年）に平重衡の攻撃で炎上しました。

義仲が出した宛先虫損の文書によれば、東大寺領から兵糧米を徴収していると聞いたが、それが事実だったら、そんなことはあってはならない、早々に停止しなければならぬと書いています。別の文書でも、大和国（奈良県）の在庁官人あてに、興福寺や東大寺の寺領への兵糧米徴収や狼藉をやめなさいという命令を出しています。従来は、義仲が兵糧徴収などを好き勝手やっていたように言われていますが、実は義仲自身はそれを止めようとしていたのです。

### 第三章 義仲の所領集積と畿内近国

#### 一 義仲の所領集積

義仲等の反平家軍は、平家を追い払って京都に入った直後、平家没官領を獲得したようです。延慶本『平家物語』に、寿永二年八月十八日、平家没官領五百余所を、義仲に百四十所余り、行家に九十所、配分したと書かれています。恐らくこれが事実、だろうと考えられるのは、『吾妻鏡』の文治三年（一一八七年）、義仲も義経も滅んだあとの話です。但馬国、今の兵庫県の北のほうに、山口家任という人がいた。彼は弓馬が達者で、木曾義仲が寿永二年八月に京都に入ってきたときに、自分の土地を安堵してもらったので義仲に属したとあります。ここに寿永二年八月とあるのが大事です。山口家任の名字の地は、平家領の但馬国山口荘でした。寿永二年八月に義仲が平家没官領を与えられたのは事実と言えます。

義仲は、京都に入ること、反乱軍から官軍に転換しました。義仲が平家没官領の上級領主権を獲得することによって、下級領主権を有する在地の武士が義仲に安堵を申請し、義仲は彼らの所領を認定するようになったのです。これまでは、反乱軍として自分の軍事力で下位者の所領を認定していたのが、それに加えて荘園の領主権という、京都を中心とする支配体系を前提にして、勢力が拡大するようになったのです。

延慶本『平家物語』によれば、八月十八日の平家没官領分配の際、義仲は、一緒に反平家軍として入京した武士に、自分が「院からの恩賞を配分する」と言いました。これは、あたかも自分の家人のように、周囲の武士を位置づけようとする戦略です。それに対して源行家は、「自分たちは院から直接もらう」と言ったとあります。これは、

自分たちは義仲と対等だという主張です。こうしたこともあって、反平家軍としてともに入京した軍事貴族・京武者たちは義仲から離反していきます。なお、軍事貴族とは、国守になれるような、武士としては比較的高い階層の家の者で、その中でも畿内近国の狭小な所領を本拠とする家の者を京武者と呼んでいます。七月に一緒に平家を追い払った京武者は、十一月十九日の法住寺合戦では後白河方に付きましました。

さて、法住寺合戦に勝ったあとの十二月、義仲は院御厩別当になりました。そして畿内近国の荘園を押し取りました。かつて平家が総官として支配していたのと同じような地域を、義仲も支配しようとしたのです。法住寺合戦のすぐあとの十二月に、但馬国温泉荘では、荘官の平季広が「この土地は義仲の所領だ。自分は義仲の家人だ」と言って、運上の年貢などを押し取ったり、荘庫に納めてある米などを奪い取ったりしました。丹後国岡田御厨でも、南北朝時代の五郎景盛の先祖に当たる人が、寿永二年十二月に義仲から土地の支配を認める下知状をもらっています。このように、義仲が京都で所領を獲得したら、それに畿内近国の在地の武士が呼応している点が重要です。

以上のように、この時期の畿内近国は京都と密接な関係にあり、義仲はその支配強化を意図しました。そして畿内近国には主体的に義仲の被官となる者がいたのです。

## 二 「義仲」の押領

しかし、それがうまくいかなかった理由も、きちんと解明しておかねばなりません。

義仲が京都に入った直後から、京では、武士や山門僧たちの狼藉が問題となっていました。京中の狼藉に貴族や寺社は迷惑していました。平家を京から追い落とすために各地から上落した武士や、もともと在京していて平家から義仲に主をかえた武士が、諸国から物資が届かない京中に一度に集まったのです。軍事貴族・京武者と競合しな

がらも、その中枢に位置したのが義仲でした。

畿内近国でも狼藉は多発しました。『醍醐雜事記』には、寿永二年九月ごろの話として、近江国（滋賀県）柏原荘を源氏木曾義仲が押妨していたため、お坊さんにお供える米などが確保できなかったことが問題になっています。この柏原荘は、東山道沿いで、美濃（岐阜県）との国境付近です。義仲が直接その地域を通ったわけではないので、東山道から上洛している美濃や尾張（愛知県）の武士、もしくはその配下に入った在地武士が押妨していたのでしよう。京都で義仲が権威を高めていく中で、こういった畿内近国の在地武士も義仲の被官を自称していったと考えられます。貴族や寺社の所領で狼藉しているというのは、義仲ではなく、新たに義仲の配下に入った者たちがやっていたことでした。それでも貴族や寺社からすれば、被官の狼藉は主人である義仲の責任です。

義仲は東大寺領や興福寺領に狼藉したり兵糧徴収したりするのは停止するように命じています。蓮華王院領の但馬国温泉荘にも狼藉停止を命ずる下文を出したのですが、しかし荘官の平季広は狼藉行為をやめませんでした。このように在地支配が不安定になった一因として、八月の平家没官領の配分を経て、義仲と京武者の関係が悪化したことがあげられます。畿内近国を本拠とする京武者は、自身の所領は狭小ですが、有事の際には、自分の所領を超えて、広域的な軍事組織を展開できました。彼らとの関係がうまくいっていたら、それなりに在地の支配にも抑えが利いたはずですが、義仲は京都で彼らと対立してしまいます。さらに後白河院が、皇位選定に介入した義仲を嫌悪していきませんが、京武者たちは、内乱が始まる前から京都で院や貴族に仕えていたので、当然、そういった人たちの意向に敏感に反応します。こうして京武者は法住寺合戦で後白河方に属すこととなり、義仲と決裂したのです。

結

かつての平家や、木曾義仲や、のちの源義経は、諸国出身の在京武士や京と緊密に結合する畿内近国の武士が麾下に参る、すなわち、その旗の下に集うような存在でした。彼等の中核として京で権力形成を図り、武士を糾合するためには、在京して、官位の上昇等で王朝権威を積極的に受容して、畿内近国支配を強化するというかたちを志向せざるを得なかったのです。しかし、主体的に義仲の被官となった京・畿内近国の武士は、自分の利害を追求して、狼藉行為を働きました。とくに義仲は、京武者との関係が悪化していることもあって、畿内近国に抑えが利かずに、狼藉を止められませんでした。義仲自身は狼藉の停止を命じているのですが、貴族や寺社は、武士の狼藉を義仲の責任と理解して、嫌悪したのです。

今回の「シリーズ・東山から発信する京都の歴史と文化」は、「王権守護と自力救済」という題です。王権守護と自力救済は、この時期の武士がもつ両面で、櫻井陽子先生の御講演に出てきた源三位入道頼政のほうが、王権守護という性格はより強いですが、義仲もこの時期の武士の一人ですので、必ずしも極端に逸脱していたわけではありません。義仲は王権守護と自力救済のどちらの側面をも持っていたと言えます。

在京武士・畿内近国武士の結集と権門の反発、その中間に位置する京武者の動向などを考えてみると、かつての平家や、のちの源義経がそうであったように、結局この時期に、在京の武家政権は可能性としてはあったけれども、やはり確立しえない権力構造になっていたのではないのでしょうか。そういった平家や義仲を見ていたために、源頼朝は鎌倉に幕府を築くに至ったのではないかと考えられるのです。

〈キーワード〉

武家政権

武士

王朝権威

畿内近国

在京